

発火法と火の起源神話¹⁾

山田 仁史

キーワード 発火法、火の起源神話、作物起源神話、シンボリズム
物質文化

はじめに

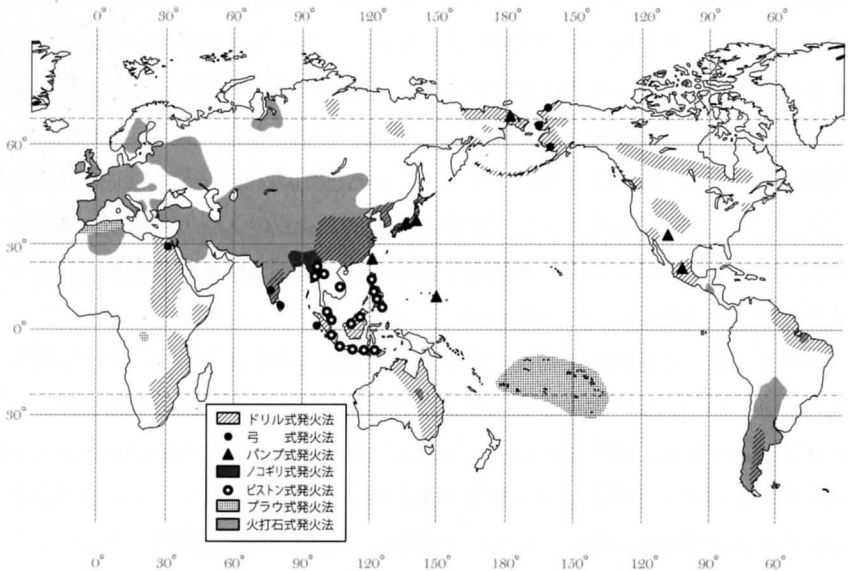
ここで取り上げるテーマは、発火法つまり火のおこし方と、火の起源神話つまり人がどのようにして火を手に入れたかについての神話である。

人間がどのようにして火をおこしてきたかについては、今回の参考館での展示にも見られるように、さまざまな火おこしの道具が残っている。それらは考古学者によって遺物として掘り出されることもあるし、民族学者や人類学者によって集められ博物館にもたらされることもある。いずれの場合でも、火おこしの道具はモノとして見ることができ、物質文化として研究することができる。ところが、いったいこうした道具を使っていた、ないしは使っている人たちが、火についてどんなことを考えていたのか、どこからもたらされ、どのようにして扱わなければならないと想像しているのか、というようなことは、物質文化の研究だけからではわからない。そうした、人間が頭の中で考えてきたことは、それではどうやって知ることができるのだろうか。その1つの方法が、神話を研究してみるということだ。神話をとおして、さまざまな民族の精神文化をさぐってゆく道が開かれるわけである。

このようなことを考えて選んだのが、発火法と火の起源神話というテーマである。さいわい、参考館の展示の中でも物質文化にかかわる部分と並んで、火の起源神話に取り上げられている。また、今日のシンポジウムの共同開催者である環太平洋神話研究会には、物質文化と精神文化両方にまたがる、さまざまな分野の研究者が参加している。そこで私は、この両方を見てゆくことで、片方だけからでは分からない様々なことが明らかになることを示したいと思う。

1 発火法の分類

まず、発火法にはどんなものがあるのか、簡単に確認しておきたい。人類が火をどうやっておこしてきたかについては、これまでも多くの学者が研究を積み重ねてきた。中でも、19世紀にイギリスの人類学者エドワード・タイラーが出した古典的な分類 (Tylor 1870: 239-246) を始め、英米の博物館に務める2人の民族学者ウォルター・ハフ (Hough 1891, 1926) とヘンリー・バルフォア (Balfour 1907, 1914) によって、その後の研究の基礎が築かれたと言える。オセアニアの発火法について文化史的観点から論じたドイツのフェリックス・シュパイザーの業績 (Speiser 1940-41) も見逃すことはできない。また、スウェーデンのラーイェルクランツによる『アフリカの発火法』 (Lagercrantz 1954) というモノグラフは、そのタイトルにもかかわらずアフリカだけでなく全世界における発火法の分布を詳細に跡づけている。こうした諸研究により、発火法の分布はかなり明らかにされており、日本で描かれた発



発火法分布図 (八幡編 1960巻末より作成)

Lagercrantz の研究 (1954) などをもとに今後描き直されるべき地図である。

火法分布図(八幡編 1960巻末)の不備な点はあらためて修正される必要がある。
う。

日本においては、鳥居龍藏(1975 a [1896], 1976 [1902]: 311-312, 1975 b [1925]: 110-125)が早くから発火法に注目し、日本の発火法の系譜についても注目すべき見解を示している。また1970年代から80年代には、様々な古代技術の復元と実験を試みた岩城正夫とその弟子の高嶋幸男により(岩城 1977, 高嶋/岩城 1981, 岩城/関根 1983, 高嶋 1983-87, 1985など)、発火法について新たな知見がもたらされることになった。

発火法を調べていて困るのは、研究者によってその名づけ方がバラバラであることだ。そこで附表に先行研究に見られる発火法の呼称一覧を掲げておいた。これと図1を参照すれば、それぞれの発火法がどのようなものであるかは分かるのではないかと思うが、ごく大雑把に説明しておこう。

まず、発火の原理として摩擦によるか、打撃や圧縮によって火をつけるか、それとも光学的方法(レンズの使用)、化学的・電気的方法(マッチ、電灯)を使うか、によって大きく5つに分けられる。これらのうち、火の起源神話によく出てくるのは摩擦法と打撃法であって、後者は火打石を使ったやり方である。摩擦法には、回転による方法と往復運動によるものがあり、後者のやり方である発火鋸や発火籐および発火型は、インドネシアからオセアニアにかけて広く見られる発火法だったが、日本にこれがあったとは確認されていない。他方、発火錐と総称される回転摩擦による発火法は、さらに4つに分けられる。火きり板の上ののせた火きり杵を動かすその方法による分類である。単純にてのひらで火きり杵を動かす揉錐、紐で動かす紐錐、弓を使う弓錐、そして舞錐で、最後のものは、はずみ車つきの錐のほか、1本の紐を両端に結びつけた1本の横棒を用意し、紐の中央を錐の上端に固定した発火具である。

日本では主にこの揉錐と舞錐が使われてきた。揉錐は世界的にみて最古の発火法ではないかとされるが(Lagercrantz 1954: 62)、鳥居が指摘したように、日本列島よりも北方では弓錐が広く用いられていた。揉錐を南方式の、弓錐を北方式の発火法と考えた鳥居は、いわゆるパレオアジア諸民族がすべて弓錐を

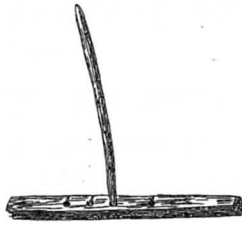
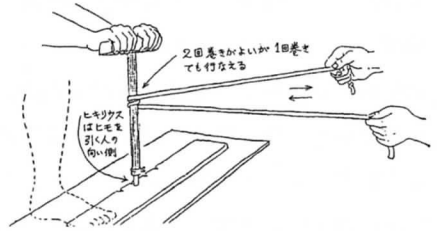


Fig. 6. Pir-dell, "Conical Anvils" (A.S.N. 14, 20, 21, 22)

<1.1 a> 揉錘、オーストラリア中央部 (Lagercrantz 1954)



<1.1 b> 紐錘 (岩城 1977)

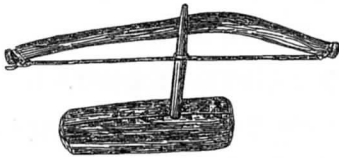


Fig. 7. Isew-dell, Chishiki (S.A.N. 17, 21, 22)

<1.1 c> 弓錘、チュクチ (Lagercrantz 1954)

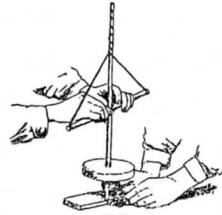


Fig. 51.

INDIGENOUS FIRE-STARTERS FOR MAKING FIRE.

(See, Pp. 190-192, U. S. N. S. Smithsonian Institution, Canada, Collected by J. P. S. Hensley.)

<1.1 d> 舞錘、イロクオイ (Hough 1891)

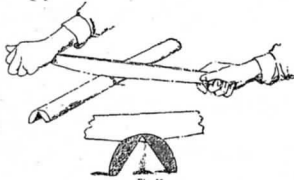


Fig. 88.

FIRE-STARTING BY SHAKING, AFTER THE BURMESE AND MALAY METHOD. (From photograph in the Kivung Museum.)

<1.2 a> 発火鋸、ミャンマー・マレー式 (Hough 1891)



<1.3> 発火犁、マーシャル諸島 (Lagercrantz 1954)

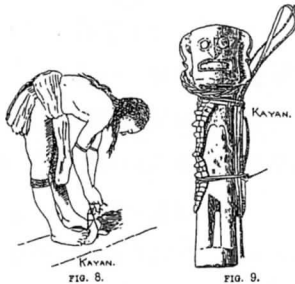
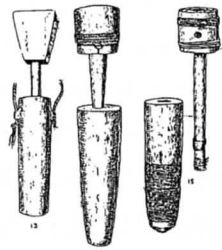


FIG. 8.

FIG. 9.

<1.2 b> 発火籐、カヤン (Balfour 1914)



<3> 発火ポンプ、東南アジア大陸部 (Balfour 1907)

図1 さまざまな発火法

用いているのに対し、アイヌでは千島アイヌが弓錐を、北海道アイヌは揉錐を使用することを挙げ、北海道アイヌも昔は弓錐を使っていたはずと推定した(鳥居 1975 b : 115)。菅江真澄の『百臼の図』に、「陸奥国蝦夷洲の火鑽の図」として弓錐の図を載せているのは、この関連で非常に興味深い(図2、cf. 高嶋 1985 : 15)。

登呂遺跡から出土した発火具が舞錐法だったか揉錐法によったかは議論されているところだが(たとえば高嶋/岩城 1981)、その使用が始まった時期とともに、日本における舞錐式発火法の系統も問題である。ラーイェルクランツによれば、舞錐はアフリカにおいてはマダガスカルからしか知られておらず、ヨーロッパでもスウェーデン、スラヴォニア、白ロシアという散発的な分布である。東・東北アジアでは台湾のタイヤル族(不確かな報告による)と日本、サモイェド、ヤクート、チュクチから見つかっているが、チュクチでは19世紀末にはもう使われなくなっていた。舞錐が盛んなのはインドネシアで、ボルネオ、マドゥラ、スンバ、ロティから知られる。さらにオーストラリア(Cue 地域)と北米(Eyak, San Ildefonso, Onondaga, Lenape)からも報告があり、北米の後二者では儀礼用の火だけがこの方法で採られていた。そして南米からは舞錐の報告がない(Lagercrantz 1954 : 26)。これは今後に残された課題である(「発火法分布図」を参照)。

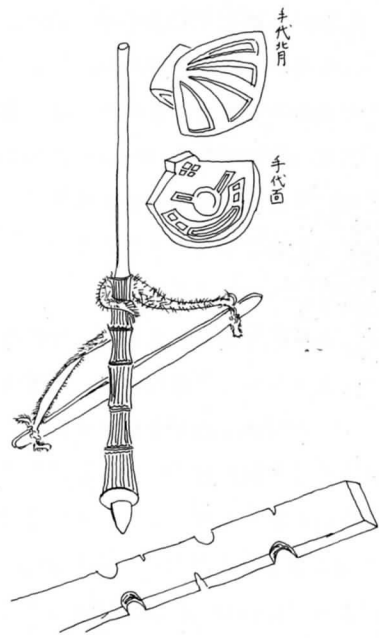


図2 菅江真澄『百臼の図』に載せる「陸奥国蝦夷洲の火鑽の図」(内田編 1989下より模写)

「錐を火針(アベケム)といひまた鑽火板を火臼(アベニシウ)といへり そのさま世にいふ舞錐のごとくまた伊勢の火鑽にもやゝ似たり 錐の柄の末を手代の穴にあててもみづる出る火をムネンネとて朽木のほぐすにうつしぬ」との菅江による解説が記されている。

2 発火錐のシンボリズム

さて、さまざまな発火法のうち、世界的にみて発火錐に性的シンボリズムがしばしば伴っていることはよく知られている。そのことは火の起源神話の中に出てくることもある。たとえば、ニューギニア島南海岸のマリンド・アニム族の神話では次のように語られる。

むかし、火を知らない時代があった。しかしある日、最初の男である Uaba ないし Obe は妻の Ualiuamb をあまり強く抱きしめたので、どんなにもがいても妻の身体から離れることができなくなってしまった。とうとう、精霊ないし超自然的な存在 (dema) が現れて、2人の身体を離すために2人を動かして、グルグル回した。すると、2人の身体をこすった所から煙と炎が出てきた。これが火と、2本の木片を摩擦することで火をおこす発火錐の起源である (Frazer 1930: 45 邦訳 73)。

ここに見えるのは、火きり杵を男、火きり板を女と見なし、男女の性行為によって火がおこるという考え方である。そしてこれは、世界中に広く見られるシンボリズムなのである。

ドミニク・ザアンによれば、火打石による発火法には、直接的には何らシンボリズムが伴うことはないが、摩擦と回転による発火法には、次のようなシンボリズムが伴うことが多い。それは、堅い木を使う火きり杵が男、柔らかい木を使う火きり板が女で、火をおこすことは両者の性交であり、火はそれによって得られた胚とか種である、という考えだ。このため、女性が発火錐によって火をおこすことを禁じている社会もしばしば見られる (Zahan 1964: 5)。地域によっては、発火法は秘伝とされて父から息子へと代々受け継がれる場合や、呪医だけの特権とされている場合もあったのである (Lagercrantz 1954: 59)。

少なくとも、火きり杵を男ないし夫、火きり板を女または妻と呼ぶ民族は数多く報告されている。アフリカでは南部バンツー (Hough 1926: 93)、東アフリカのキクユ族 (Hough 1926: 94)、アフリカ南西部のベルクダマ族 (Frazer 1930: 111 邦訳 167)、マダガスカルのカカラヴァ族 (Frazer 1930: 110 邦訳 166) などであり (ほかに Lagercrantz 1954: 58-59 に例多数)、東南アジアで

はマレー語で火きり板を母 (ibu) とか女 (perampuhan)、火きり杵を牛 (anak) また男 (laki-laki) と呼んだ例があり、こうした呼称は「性交のやり方が2つの木片に移されたものであろう」(Pleyte 1891: 54)。

さらにまたこのシンボリズムは、最初の火は女の体内にあったという形で神話にも現れることがある。日本神話にもその例と見られる話があることは、すでにたくさんの学者が注目してきたところだ(たとえば大林 1991)。『古事記』によれば、原初の夫婦神であるイザナキとイザナミは国土を生んで後、多くの神々を生んだ。その際、鳥の石楠船の神(天の鳥船)とオホゲツヒメを生んだ次に、ホノカグツチ(またの名をホノヤギハヤヲとかホノカガビコ)という神を生んだ。その結果、イザナミは「御陰炙かえて病み臥せり」という。つまり、女神のイザナミは自分の体内にいた火の神カグツチを生んだ時、女陰を焼かれて病気になってしまったというわけである。ここには、女性の身体の中に火があったという考え方が表現されているし、この結果としてイザナミが死んでしまったというのは、高木敏雄(1904: 139)が述べたように火きり臼が焼けてしまうさまを表現したとも見ることができよう。

大林太良が指摘したとおり、火が女の体内にあったという神話は日本の外ではメラネシア、ポリネシア、そして南米から知られている。そしてその中でも、女性器の中に火があったという考えは、ニューギニアとその周囲に多い。ひとつ例を挙げよう。ニューギニア南東端に近いミルン湾のワガワガからの報告である。

むかし、人々がまだ火を知らなかったころ、1人の老女がいた。その当時はヤムイモやタロイモをうすく切って日干しにしていたので、老女は10人の若者の食事をこのやり方で作っていた。ところが、彼らが森で野生ブタを狩っている間、彼女が自分の食事を料理する時には、自分の身体から火を取り出して使っていた。そして、若者たちが帰って来るまでには灰とか食べ残しをすっかり始末してしまい、火のことは秘密にしていた。

しかしある日、若者たちの食事に煮たタロイモが混じってしまった。夕食の時、いちばん年下の少年がそのタロイモをつまんで食べてみるととて

もうまいので、仲間にもそれをすすめた。少年たちは、タロイモがどうしてこんなにうまいのか不思議に思い、次の日みんなが森に狩りに行った間、いちばん年下の少年が家に残って隠れていた。すると老女は、自分の食事を料理する前に、脚の間から火を出していた。少年はこれを仲間に話し、老女からそれを盗むことに決めた。

次の日、いつものように若者たちは狩りに出かけ、いちばん年下の少年だけが老女の家に残って、老女がタロイモを料理し始めると後ろからすべりこんで燃え木を取り、それを持って逃げ出した。火は草やタコノキに燃え移った。この木には Garubuiye ヘビがいて、その尻尾に火がつき松明のように燃え上がった。老女は大雨を降らせて火を消したが、ヘビの尻尾の火だけは消えなかった。このヘビの尻尾から、人々は火を手に入れた。その後この Garubuiye ヘビは、ワガワガのガルボイ氏族のトーテムになっている (Frazer 1930 : 43-44 邦訳 70-72)。

このように、火が女性の身体の中にあるという考えは、火きり板を女性と見る観念と通じるものであろう。この考えはまた、発火具として使われる木そのものの中に火が隠れていて、これを摩擦することで木の中に隠れていた火が外へ出てくるといふ観念として表現される場合もある。

おそらくそうした観念がもとになっているのではないかと思われるのは、バルフォアが紹介しているボルネオ島カヤン族の発火具である。この発火籐をこする木片には、火の神 Laki Pesong が彫られている。カヤン族のもとでは、発火籐による火おこしは19世紀末にはすでに儀礼用としてしか行われなかった。その儀礼とは、子供の名づけの儀礼であって、この火の神に対して子供の長寿が祈られたのだという。火のつけ方は、籐蔓でこの神像の脚の1本をこするのであり、蔓が切れるかどうかで選ばれた名前の吉凶が占われたともされている (Balfour 1914 : 38-39)。明白に述べられてはいないが、火の神の体内(性器内?)に蓄えられている火が摩擦によって取り出されるという観念が背景にあるのではなかろうか。

実は、原古にもたらされた火が何種類かの木の中に入れられ、それらの木が

発火に適した木になったという伝承は、とりわけポリネシアに濃密に伝わっている (cf. Frazer 1930 : 223 邦訳 334-335)。たとえばニュージーランドの東にある Chatham 諸島の神話では、文化英雄のマウイがマウヒカの所から盗んだ火を 6 種類の木に投げ入れた。これらの木が発火用に用いられるのはそのためである。またマウイは石の中にも火を入れたが、それが火打石になった (Frazer 1930 : 58-59 邦訳 91-92)。

これと似たことを述べていると思われる部分は、日本神話にもある。先に挙げたカグツチの神話は『古事記』以外にも、『日本書紀』の一書第二、三、四、五、六、七、八および『延喜式』の鎮火祭の祝詞にも出ている。それらに共通する内容として、次の諸点が挙げられることは、すでに大林により指摘されたとおりである。

- 1 火の神は原初の夫婦神が生んだものである (記、紀一書二、三、四、五、六、祝詞)
- 2 イザナミが病臥中に排泄したものが神々になった (記、紀一書二、四)
- 3 イザナミは火の神を生んだために死ぬ (記、紀一書二、三、五、六、祝詞)
- 4 イザナキの悲嘆の涙が神となった (記、紀一書六)
- 5 カグツチをイザナキが刀を以て斬り殺し、刀についた血が神々になった (記、紀一書六、七、八)
- 6 カグツチの死体の各部分に神々が生じた (記、紀一書六、七、八)

(大林 1991)

このうち、5 と 6 の点について『日本書紀』の一書第八におもしろい記述がある。つまり、イザナキがカグツチを斬ったところ、首・身中・手・腰・足という 5 つの部分からそれぞれ山^{やまづみ}祇が生まれたわけだが、さらに「是の時に斬る血^{たぎ}激ち^{そそ}灑ぎて、石^{いし}礫^{むら}・樹^{きく}草^さを染む。此、草木^{こゝ}・沙石^{いさごいし}自づからに火^{かみ}を含む^{えに}縁なり」。つまり、カグツチという火の神の血がほとぼしり、石や草木を染めた。このために、草木や石には火が含まれている、というのである。先に見た Chatham 島の神話などポリネシアの伝承を考慮するならば、これは火の神の血

がついた植物とか火打石は中に火を含むために発火に適している、ということ
を述べたものではないかと考えられる。

3 火の起源と作物の起源

ところで、火の起源神話はこれまで多くの学者によって集められ(Kuhn 1886, Dähnhardt 1907-10, Frazer 1930, Seiffert 1987)、ことにフレイザーの労作によって我々は世界における分布の大勢をうかがうことができる。それを見ると、すでに述べてきたような、女性の身体の中に火があったという神話の他に、鳥などの動物あるいは神的な人間などが、どこかから火を盗んできたという神話が非常に多いことがわかる。

そして、この火の起源神話におけるこれら2つのタイプは、すでに言われてきたように、作物の起源神話における2つのタイプと対応している。つまり、作物の起源についても、女性の身体から作物ことにイモとか果実が発生したというタイプの神話(ハイヌヴェレ型)がある一方で、とくに穀物をどこかから盗んできたというタイプの神話の存在も知られているのである。そして後者のタイプは、ギリシャ神話においてゼウスが隠した火を天から盗んできた英雄の名にちなんで、プロメテウス型と呼ばれているほどなのだ。

問題は、なぜこのような対応が見られるか、ということである。1つにはやはり、同一の世界観ないし世界像を、火と作物の起源神話の両方にあてはめた、ということだろう。女性の身体の中に有用な物が隠されているという観念、これにはまた、初期農耕において女性がはたした役割なども考え合わせる必要があるだろうが、そうした観念が、たとえば日本神話におけるカグツチの神話とオホゲツヒメの神話の共通の根底としてあったのだろう。そこに、火きり杵と火きり板の動きの観察とか、作物の起源神話の場合であればイモの育て方の経験などが加わって、神話として語られるようになったものと思われる。

そしてまた、火と作物というのは、料理という媒介項によってただちに結びつきうる必然性をもっている。人類史における火の意義について古典的な著作をあらわしたハフ(Hough 1926: xi)によれば、火がもつ働きには、熱を与

えるということと光を与えるという、2つの大きい働きがあるという。そのうちでも、数々の火の起源神話においてことに重要な意義を持っているのは、料理に必要な熱を与えるという火の機能である (cf. 石上 1967: 228, 254)。つまり、火の起源は、それによって作物が料理されることの起源を語っている場合が少なくない。それまで生まの食物しか口にできなかった人間が火を手に入れたことにより、料理が可能になり、金属の利用や土器作りも可能になった。すでに言われているように、日本神話においてカグツチの直前にオホゲツヒメという作物の女神が、カグツチの直後にはカナヤマビコ・カナヤマビメという金属の神とハニヤスピコ・ハニヤスピメという粘土の神が生まれたのは、火を媒介とした自然から文化への移行を語っているのであろう。

おわりに

今回のべたような発火技術は、現在ではもうすっかりなくなってしまったかということ、そんなことはない。日本においても、各地の神社などで神事のための火を鑽る際には、いまだに揉錐や舞錐が用いられている (文化庁文化財保護部編 1981, 高嶋 1983-87, 柳田 1998: 384)。私も三重県鳥羽市沖の神島で、頭屋の行事として行われる新暦大晦日から元旦にかけての祭礼において、新しい火を揉錐によって鑽り出すのを見たことがあるし、中国雲南省の彝族の支系にあたる阿細人のもとでは、火をおこすのに初めて成功したとされる原古の神人木鄧 (ムートン) を記念する火祭において今でも揉錐により火をおこしていた (写真1)。

他方、こうした古い発火法は教育の場でも利用されているようだ。埼玉県立博物館を訪れた際、舞錐による発火の



写真1 中国雲南省弥勒県にて、彝族の支系阿細人の火祭において巨大な火鑽杵と火鑽板で発火する人々 (2006年3月筆者撮影)

体験コーナーが設けられており、子供が喜んで火おこしに取り組んでいるのを見た(写真2)。みずから手で火をおこすということは、人間にとって根源的な喜びをひきおこす魅力を持った行為なのかもしれない。



写真2 埼玉県立博物館の発火体験コーナーにて、舞錐で発火する来館者(2005年12月筆者撮影)

いずれにしても、こうしたいろいろな形で古い発火技術が今後も引き継がれてゆくことだろうが、その際にも物質文化だけでなく、それをめぐって語られ伝えられてきた様々な神話や観念のような精神文化にも、少しでも目を向けていきたいものだと願っている。

註

1) 本稿は、2006年3月18日に天理大学附属天理参考館(奈良県天理市)において同館と環太平洋神話研究会の共催で開かれたシンポジウム「火と神話の世界」で発表したものである。その概要は既に『天理参考館報』第19号に、その他の発表者の報告概要と共に掲載された(山田 2006)。本稿は、そこに収録できなかった地図・図・引用文献も含んでいる。

シンポジウムの折に大変お世話になった吉田裕彦(天理参考館)・後藤明(同志社女子大学・環太平洋神話研究会)両氏を始めとする諸氏、そして今回も美しい地図を仕上げてくださいました物部朋子さんに心から感謝申し上げます。

引用文献

Balfour, Henry. 1907. The Fire-Piston. In: *Anthropological Essays presented to Edward Burnett Tylor in Honor of his 75th Birthday, Oct. 2, 1907*: 17-49. Oxford: Clarendon Press.

———. 1914. Frictional Fire-Making with a Flexible Sawing-Thong. *Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, 44: 32-64.

文化庁文化財保護部(編)1981『火鑽習俗』(民俗資料選集;11)東京:国土

地理協会.

Dähnhardt, Oskar. 1907-12. *Natursagen. Eine Sammlung naturdeutender Sagen, Märchen, Fabeln und Legenden*, 4 Bde. Leipzig : B. G. Teubner.

Feest, Christian F. & Alfred Janata. 1999. *Technologie und Ergologie in der Völkerkunde*, Bd. 1, 4., grundlegend überarbeitete Aufl. Berlin : Dietrich Reimer.

Frazer, James George. 1930. *Myths of the Origin of Fire*. London : Macmillan. (フレーザー、J・G『火の起原の神話』角川文庫、青江舜二郎訳、東京：角川書店、1971年).

Hough, Walter. 1891. *The Methods of Fire-Making. Annual Report of the Board of Regents of the Smithsonian Institution, showing the Operations, Expenditures, and Condition of the Institution for the Year ending June 30, 1890* : 395-409.

———. 1926. *Fire as an Agent in Human Culture*. (United States National Museum Bulletin ; 139). Washington : Smithsonian Institution.

石上 堅 1967『火の伝説』東京：宝文館出版.

岩城正夫 1977『原始時代の火：復原しながら推理する』東京：新生出版.

岩城正夫／関根秀樹 1983「古文獻に見られる古代発火技術について：主に日本のばあい」『和光大学人文学部紀要』18 : 103-113.

Kuhn, Adalbert. 1886. *Die Herabkunft des Feuers und des Göttertranks*, 2., vermehrter Abdruck. (Mythologische Studien von Adalbert Kuhn ; 1. Bd.). Gütersloh : Bertelsmann. (1. Abdruck erschien 1859).

Lagercrantz, Sture. 1954. *African Methods of Fire-Making*. (Studia ethnographica Upsaliensia ; 10). Uppsala : Almqvist & Wiksell.

大林太良 1991「火の起源神話」『神話の系譜：日本神話の源流をさぐる』（講談社学術文庫；957）：217-231. 東京：講談社. (初出は、「日本神話の比較民族学的考察：火の起源神話を中心として」『歴史教育』14〈4〉：1-8, 1966年).

- 大林太良／杉田繁治／秋道智彌（編）1990『東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析』（国立民族学博物館研究報告別冊；11）吹田：国立民族学博物館。
- Pleyte, C. M. 1891. Indonesisches Feuerzeug. *Globus*, 59 : 52 - 56.
- Seiffert, Beate. 1987. *Die Herkunft des Feuers in den Mythen der nordamerikanischen Indianer*. Unveröffentlichte Magisterarbeit München.
- 清水昭俊 1974「火の民族学」大林太良（編）『火』（日本古代文化の探求）：11 - 95. 東京：社会思想社。
- Skertchly, Sydney B. J. 1889. On Fire-Making in North Borneo. *Journal of the Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, 19 : 445 - 452.
- Speiser, Felix. 1940 - 41. Über Feuerzeuge in der Südsee. *Anthropos*, 35 - 36 : 239 - 263.
- 高木敏雄 1904『比較神話学』東京：博文館。
- 高嶋幸男 1983 - 87「火鑽習俗にみられる発火技術」『北海道教育大学紀要 第1部C 教育科学編』34(1) : 43 - 56, 34(2) : 45 - 60, 35(2) : 45 - 58, 37(2) : 49 - 62.
- 1985『火の道具』東京：柏書房。
- 高嶋幸男／岩城正夫 1981『古代日本の発火技術：その自然科学的研究』東京：群羊社。
- 鳥居龍蔵 1975 a 「発火用紐錐ニ就テノ二事実」『鳥居龍蔵全集』1 : 624 - 629. 東京：朝日新聞社。（初出は、『東京人類学会雑誌』126, 1896年）。
- 1975 b 『人類学上より見たる我が上代の文化』（鳥居龍蔵全集；1 : 13 - 166頁）東京：朝日新聞社。（1925年、東京：叢文閣刊）。
- 1976『紅頭嶼土俗調査報告』（鳥居龍蔵全集；11 : 281 - 353頁）東京：朝日新聞社。（1902年、東京：東京帝国大学刊）。
- Tylor, Edward Burnett. 1870. *Researches into the Early History of Mankind and the Development of Civilization*, 2nd ed. London : John Murray. (1st ed. published in 1865).

- 内田ハチ (編) 1989『菅江真澄民俗図絵』上中下、東京：岩崎美術社。
- 柳田国男 1998『火の昔』(柳田国男全集；14：327-459頁) 東京：筑摩書房。
(初出は東京：実業之日本社から1944年刊)。
- 山田仁史 2006「発火法と火の起源神話」『天理参考館報』19：46-50。
- 八幡一郎 (編) 1960『生活技術の発生』(図説世界文化史大系；1) 東京：角川書店。
- Zahan, Dominique. 1964. *Techniques, mythes et rites concernant le feu en Afrique Noire*, 3 tomes. Manuscript.

附表 発火法の名称一覧

1 摩擦法

1. 1 ^{はっかきり} 発火錐 (fire drill; Feuerbohrer). ^{もみざり} 揉錐、^{ひもざり} 紐錐 (cord drill)、^{ゆみざり} 弓錐 (bow drill)、^{まいざり} 舞錐 (pump drill) が含まれる。

Tylor 1870 : fire-drill, cord-drill, bow-drill, pump-drill

Hough 1891 : hand drill, cord drill, bow drill, pump drill

鳥居 1976 : 揉錐、紐錐、弓錐、舞錐

Speiser 1940-41 : Feuer-Bohrer

Lagercrantz 1954 : Fire-drill, Cord-drill, Bow-drill, Pump-drill

八幡 (編) 1960 : ドリル式、一、弓式、ポンプ式

清水 1974 : 揉錐、綱引き錐、弓引き錐、舞い錐 (ポンプ錐)

岩城 1977 : キリモミ式、ヒモギリ式、弓ギリ式、マイギリ式

大林／杉田／秋道 (編) 1990 : 発火錐

Feest & Janata 1999 : Feuerbohrer

1. 2 ^{はっかのこざり} 発火鋸 (fire saw; Feuersäge). ^{はっかとう} 発火籐 (frictional fire-making with a flexible sawing-thong; Rotangsäge) (cf. Balfour 1914) も原理的にこれと同じ。鋸の材質が堅いか柔らかいかにより区別される。

Tylor 1870 : friction of two pieces of wood

Hough 1891 : sawing

- 鳥居 1976：相互摩擦
- Speiser 1940-41：Brettsäge, Spaltsäge, Rotang-Säge
- Lagercrantz 1954：Fire-saw, Flexible Sawing-thong
- 八幡（編）1960：ノコギリ式、-
- 清水 1974：鋸火鑽
- 岩城 1977：ノコギリ式、糸ノコ式
- 大林／杉田／秋道（編）1990：発火鋸、発火籐
- Feest & Janata 1999：Feuersäge
1. 3 ^{はっかり}発火犁（fire plough；Feuerpflug）.
- Tylor 1870：stick-and-groove
- Hough 1891：plowing
- 鳥居 1976：進退摩擦
- Speiser 1940-41：Feuerpflug
- Lagercrantz 1954：Fire-plough
- 八幡（編）1960：プラウ式
- 清水 1974：犁火鑽
- 岩城 1977：ヒミゾ式
- 大林／杉田／秋道（編）1990：発火犁
- Feest & Janata 1999：Feuerpflug
- 2 打撃法（strike-a-light；Schlagfeuerzeug）. ^{ひうちいし}火打石（flint, firestone；Feuerstein）
^{ひうちかね}と火打金（steel；Stahl）、または火打石と黄鉄鉱（pyrites；Pyrit）に
 による。石・陶片・火打金などと竹による方法もあり（Skertchly
 1889；Pleyte 1891）.
- Tylor 1870：-
- Hough 1891：(a) The flint and steel briquet, or strike-a-light；(b) Flint
 and pyrites
- 鳥居 1976：-
- Speiser 1940-41：Feuerschlagen（Stein und Pyrit）

Lagercrantz 1954 : Fire-making with Steel and Stone

八幡 (編) 1960 : 火打石式

清水 1974 : 火打ち石

岩城 1977 : 火花式

大林 / 杉田 / 秋道 (編) 1990 : 火打石、火打金

Feest & Janata 1999 : Schlagfeuerzeug

3 圧縮法. 発火ポンプ (fire piston ; Feuerpumpe) (cf. Balfour 1907).

Tylor 1870 : -

Hough 1891 : fire syringe

鳥居 1976 : -

Speiser 1940-41 : -

Lagercrantz 1954 : Fire-syringe

八幡 (編) 1960 : ピストン式

清水 1974 : 火鑽ピストン

岩城 1977 : -

大林 / 杉田 / 秋道 (編) 1990 : 発火ポンプ

Feest & Janata 1999 : Feuerpumpe

4 光学的方法. レンズによる.

5 化学的・電気的方法. マッチ、電灯. 近代産業の産物.

Fire-Making Methods and Myths of the Origin of Fire

Hitoshi YAMADA

Deeper understandings of material culture can be achieved by looking at various symbolisms, myths and notions surrounding it. As an instance of such an approach, it is shown in this paper that some fire-making methods have been closely associated with symbolic and mythological ideas. One of the most widespread among them is the sexual symbolism connected with fire drills, in which the vertical drilling stick (usually of harder wood) is considered male and the horizontal one female. Fire-making by this method is thus symbolically looked on as the act of sexual intercourse. Besides, this idea can be found in some mythological episodes that attribute the origin of fire to the woman's body. In Japanese mythology for example the primordial woman Izanami gave birth to the fire deity Kagutsuchi, who, burning her vagina at the time of his birth, made her seriously sick and eventually dead. Another notion concerning the origin of fire is that fire was originally concealed in certain sorts of wood, which are thought of as suitable for fire-making. Some Polynesian myths tell us how fire was put into these wood in the time immemorial, explaining why they are apt to catch fire. Not only myths of the origin of fire themselves but the resemblance of them to myths of the origin of crops, too, deserves notice. Both of them have two typical stories which are absolutely different in the worldview: fire and crops were hidden in the body of a woman in one type, while in the other they were obtained from somewhere (Hainuwele and Prometheus types, to use the terms of Adolf E. Jensen). Here, the same pictures which fire and crop mythologies have in common are obviously to be recognized. The reason of this correspondence might lie in the fact that fire and crops are readily associated by one intermediate element: cooking. Finally, archaic fire-making methods are still in use and some of them, of which demonstration courses among children in particular, have achieved popularity in museums at least in Japan.